

# 足音

一〇月二十八日  
石巻中一年  
学年通信No.三十三  
編集・発行

鈴木 孝明

## 一年組曲

一年生が合唱コンクールの練習を始めたころはまだ青かった柿の実も、本番を迎えた昨日には、すっかり赤く実っていた。この日を迎える興奮を抑えきれないかのように。

初めての合唱コンクール、さらには久々の開催ということもあって、これまでに以上に長い練習期間で取り組んできた。

思い出せば、様々な姿が目に見えかかってくる。例えば、クラスの前で威勢よく整列を呼びかける指揮者が。

例えば、大きなキーボードを学年室から懸命に抱えていく伴奏者が。それに気づいて手伝う仲間が。

例えば、困ったような顔で「今のどうでした？」と聞いてくるパトリリーダーが。

闇雲に歌うだけだった日々が。少しずつ仲間の声に耳を傾け、話し合うようになった日が。

そうしてたどり着いた昨日、十月二十七日「令和4年度合唱コンクール」。  
いっぴりだろうと思う



ほど久しぶりだった全校での校歌斉唱に続き、一年生の学年合唱。堂々とした伴奏者の打鍵に引張られるようにして発せられたみんなの歌声は、二週間前に聴いたものとは様変わりしていた。合唱コンクールという舞台にたどり着くまでにみんなが歩んだ確かな道のりがあることがわかった。

スタートは二組「COSMOS」。普段の勢いそのままに、メロディが進むにつれ盛り上がり、それは「光の声」で一体となる。あの声は、今も耳に残ってる。サビ部分の繰り返しも、光の強さを増すように音量を上げ、ラストは静かに余韻を残した。学年の、いや学校全体のスタートを切った二組は、そのステージに歌声で見事な秋桜（コスモス）を咲かせた。

二番手は三組「この星に生まれて」。二週間前のリハーサルでは、自分たちの出来に、誰よりも自分たちが悔しがっていた。静かな伴奏の入り、それに寄り添い友を励ますような美しい声響く。「Dreams Come true（夢はかなう）」に皆の声と息がそろった。この星に生まれて、ここに集って歌う意味を、その価値を証明してみせた。最優秀おめでとう。三番手は一組「マイバラード」。入りのフレーズ「みんな」が、本当にみんなでの歌声に聞こえている。その先に続く励ましのメッセージの数々を、あたたかな声で心で、愛のメッセージとして体育館に響かせた。本番直前まで笑顔で歌うことにこだわり続けたのは立派だった。

それこそが、一組だけの「マイバラード」私の物語」なのだろう。

ラストは四組「Let's Search for Tomorrow」。よくそろったブレスの入り。強弱のメリハリをつけ「明日を探しに行こう」に向けて一体感をもって盛り上がる。サビのフレーズは、みんなが明日へ、未来へと向かう力強さを感じた。曲のラストのハーモニー、それが残した余韻は、明日への希望を約束する明るさに満ちていた。

こうして一年生の、初めての合唱コンクールは終わった。どのクラスも心に響く歌声だった。みんなにとってもそうだったことだろう。

実は、一年生の歌う順で、一つおもしろいことがあった。各クラスの希望をとってから決めることにしたら、なんと全クラス希望が重ならず、第一希望の順番で歌うことになった。そうした意味では、すでに順番決めから始まっていた全クラスで作り上げた「一年組曲」とも言える。さすがだ。

昨日終わったのは、「一年生の」合唱コンクール。みんなにはまだその先がある。それは、先輩方が示してくれた（ぜひ生で聴いてほしい）。心に残った歌声がきこえたことだろう。ああなりたいと思った姿もあったことだろう。

一年後、さらには二年後の歌声は、そして、この石巻中を去るその日に響く歌声は、どんなものだろう。少し切なくも、楽しみである。